

# 中華人民共和国福建省東部における閩東語テレビ放送について——方言放送専門チャンネルの開設をめぐって

(公益財団法人大学基準協会) 小田 格

## 〔要旨〕

本稿は、福建省における方言番組の実情及び関連政策の実態の解明に資するよう、福州電視台の閩東語テレビ放送に関する事例を考察するものである。具体的には、同省の閩東語放送の歴史及び現状を俯瞰し、福州電視台の方言放送専門チャンネル開設をめぐる動向を確認したうえで、判明した事実に検討を加えた。その結果得られた知見は、次の通りである。すなわち、福建省東部では、ラジオ局に方言放送専門チャンネルの開設が許可されたにもかかわらず、テレビのそれは認められなかつた。しかし、福州電視台は、その後徐々に閩東語番組を充実・拡張させる形で、既存の生活チャンネルの実質的な方言放送専門チャンネル化を果たしたのである。

## I. 序論

従前、本邦にあっては、台湾の言語政策に関する論考が一定程度存在していたが、海峡を隔てて向かい合う中華人民共和国（以下、中国）福建省の言語政策を対象とした論考は、皆無に等しい状況にあった。そこで、筆者は、拙稿（2016a）で同省南部の閩南語テレビ放送の考察を行い、法令等の精査を通じて、それが対台湾政策下の特例措置の適用を受けたものであることを明らかにした。

この特例措置の最たる例として挙げられるのが泉州電視台閩南語チャンネル（QZTV-4）である。同チャンネルは、2006年12月に国家廣播電影電視總局（以下、廣電總局）から漢語方言（以下、方言）による放送の専門チャンネル（以下、方言放送専門チャンネル）として開設許可を受け、翌年5月から放送を開始した。本誌掲載の拙稿（2016b；2017）で確認した通り、2004年以降中国では、廣電總局が方言を使用した番組（以下、方言番組）に対する規制を発動し、さらに浙江省及び江蘇省では、独自の規制通知まで発出された。

泉州電視台閩南語チャンネルは、こうした全国的な方言番組規制の直後に開設されたものであり、極めて特異な存在として指摘される。

さて、本稿の目的は、拙稿（2016a）に引き続き、福建省東部の閩東語テレビ放送に焦点を当て、福州市廣播電視集團（以下、福州廣電集團）傘下の福州電視台<sup>(1)</sup>の事例を考察し、もって同省の方言テレビ放送の実情及び関連政策の実態を更に解明していくことにある。周知の通り、福州市の目前には、台湾（中華民国）が実効支配している馬祖列島が存在しており、この両地で主流の方言は閩東語である。それでは、こうした環境下での閩東語テレビ放送もまた対台湾政策の一環に位置づけられ、かつ、特例措置の適用を受けているのだろうか。本稿の関心は、正にこの点にある。

結論を先取りするならば、福建省東部の閩東語テレビ放送をめぐる状況は、同省南部の閩南語のそれとは異なる様相を呈していることが判明した。すなわち、廣電總局は、同地のラジオ局に方言放送専門チャンネルの開設を許可したが、テレビのそれは認めなかつた。しかし、福州電視台は、その後徐々に閩東語番組を充実・拡張していく形

で、既存のチャンネルを実質的に方言放送専門チャンネルとしたのである。

なお、本稿にいう「閩東語」とは、福州市及び馬祖列島で使用されているものの総称とし<sup>(2)</sup>、引用文中等の「福州話」はここに含まれるものである。

## II. 放送状況等

本章では、福建省における閩東語放送の足跡を辿るとともに、現在の閩東語テレビ放送の実施状況を確認する。

### 1. 閩東語によるラジオ放送

福建省における閩東語放送の歴史は古くにまで遡ることができる。『福建經濟年鑑』1985年版(p.428)の放送事業に関する記事によれば、1949年8月24日19時に福州人民廣播電台（以下、福州電台）が標準中国語（以下、普通話）、閩東語及び閩南語により、自身の設立を宣言したこととなる。

『福建省志・廣播電視志』(pp.314-323)に掲載された福建人民廣播電台（以下、福建電台）の番組表を確認すると、1954～1969年にかけては、表1のような閩東語による番組が存在していたことが分かる。

また、『中国廣播電視年鑑』1986年版(pp.142-145)の「福建省におけるラジオ・テレビ放送事業発展の概況」という記事には、1985年の段階でも普通話、閩東語及び閩南語の3言語が同省のラジオ放送で使用されていたと記載されており、同年鑑1988年版(p.572)掲載の「1987年の国内向けラジオ放送での使用言語の名称」にも、閩東語である「福州話」の記載が確認できる。

1980年代に放送されていた閩東語番組の具体例としては、「対馬祖廣播(馬祖に対するラジオ)」(福州電台)が挙げられる(『中国廣播電視年鑑』1989年版, p.276)。同番組は、専ら馬祖に対する宣伝を目的として、1988年7月2日にスタートしたものであり、普通話版・閩東語版の新規放送・再放送が毎日各1回ずつ実施されていた。

その後に關しても、各年の『中国廣播電視年鑑』に掲載された「国内向けラジオ放送での使用言語の名称」を確認する限り、閩東語は国内向けラジオ放送で使用され続けてきたことが分かる。ただし、閩東語番組は、1990年代以降にラジオ放送の商業化が進展してからも、基本的に馬祖列島又は農村部に対する宣伝を目的としたプログラムに限定されていたようである。宋(2010)は、2003年頃から閩東語のバラエティ番組が福建電台都市生活チャンネル(FM98.7)等で始められ、そこか

表1 1954～1969年における福建電台の閩東語番組

放送時期	チャンネル	番組名
1954年	第二台 (AM1500)	「福州話工人節目」,「福州話店員節目」,「閩劇評話節目」,「福州話政治時事講話」, 「福州話新人新事節目」,「福州話農民節目」,「福州話新聞」
1965年 (秋季)	第二套 (AM1430)	「新聞(福州話)」,「福州戲曲」,「在福建各地(福州話)」,「對農村廣播(福州話)」
1969年 (春季)	第二套 (AM580)	「學習毛主席語錄(福州話)」,「“老三篇”天天學(福州話)」,「新聞(福州話)」, 「對農村人民公社社員廣播(福州話)」,「工農兵活學活用毛澤東思想節目(福州話)」

(『福建省志・廣播電視志』に基づき筆者作成)

ら一定のリスナーを獲得していくと記述しており、当該方言の使用が一般的なラジオ番組にまで波及していくのは、2000年代に入ってからと見られる。

そして、2010年10月18日には、広電総局から閩東語による方言放送専門チャンネルとして開設許可を受けた福州電台左海之声チャンネル(FM90.1) (以下、左海之声) が放送を開始した(『福州年鑑』2011年版, p.336)。同チャンネルは、「閩都の文化を示し、福州の故郷のことばを伝え、馬祖の同胞、そして起業・投資及び親族訪問・旅行のために福州を訪れた台湾同胞とその親族に奉仕する」をキャッチフレーズとしており<sup>(3)</sup>、その存在は形式・実質の両面からして対台湾政策の一環に位置づけることができるものである。

## 2. 閩東語によるテレビ放送

『中国広播電視年鑑』1986年版 (p.788) を確認すると、福州電視台では、1980年代の設立当初から閩東語を使用した伝統芸能である閩劇や評話を放送してきたことが分かる。また、宋 (2010)によれば、過去には閩東語によるニュース番組も若干存在していたようである。

しかし、各種論考を確認する限り、閩東語を使用した初のテレビ番組として具体的な名前が挙がっているのは、2000年頃<sup>(4)</sup>に福州電視台生活チャンネルでスタートした「榕城風(榕城の風)」である。同番組は、伝統芸能関係の内容を中心としつつ、各種コーナーが設けられ、2003年からはニュースも取り扱われるようになった(呉(2003))。もっとも、「榕城風」は、「全国優秀文化(文芸)テレビ番組賞」の受賞歴もある番組であったが(『福州年鑑』2008年版, p.344)、視聴率ランキングの上位に入るほどの人気ではなかった。

閩東語テレビ放送が一般視聴者の支持を広く集めて拡大していくのは、2008年3月16日に「攀講

(おしゃべり)」が開始して以降である。同番組のタイトルは、「(あれやこれやと) おしゃべりする」という意味の閩東語の語彙「攀講 [pʰan44 ɲour32]」であり、福州市周辺のニュースを中心に雑多な話題を取り扱うバラエティ色の強い内容とされた。

郭 (2007) は、福州広電集団の関係者が福州電視台の取組みについて紹介した記事である。当該記事では、当時、福州電視台生活チャンネルのブランディングが課題であり、この解消を図るために方策として、生活情報番組や方言番組の導入に関する考えが示されており、「攀講」は、こうした状況下で構想・企画されたものと推察される。また、方言番組の導入に関しては、既述の閩東語を使用したラジオのバラエティ番組や「榕城風」の評価を勘案した結果と見られ、他省での方言ニュース番組の成功事例等を参考にした可能性も指摘できる。

2009年以降「攀講」は、表2の通り、高視聴率を記録するようになるとともに、2010年以降はテレビ番組関係の賞を数々受賞している(呉(2013))。

このような好成績を背景として、福州電視台生活チャンネルでは、「攀講」の名を冠した番組が次々放送されるようになる。すなわち、2009年以降、映画素材に閩東語音声を配した「攀講電影(お

表2 福州市におけるテーマ別特集番組の視聴率上位10作品における「攀講」の順位及び視聴率

	順位	平均視聴率
2008年	圏外	—
2009年	3位	2.2%
2010年	1位	5.2%
2011年	2位	4.2%
2012年	2位	3.7%
2013年	3位	2.9%

(『中国電視收視年鑑』2008~2013年版に基づき筆者作成)

しゃべり映画)」<sup>(5)</sup>、素人の出演者による短編ドラマ「攀講故事会(おしゃべりドラマシリーズ)」、インターネット上の話題を取り扱う「攀講網事(おしゃべりネット情報)」、閩東語の簡単な会話フレーズや単語等を教える「攀講学堂(おしゃべり教室)」などが登場した。さらに、同時期には、閩東語のバラエティ番組「福州話我最霸(福州話は私が一番)」も始められ、2011年には閩東語による旧正月前の大型バラエティ番組「十邑春晚(福州十邑の年越夜会)」も投入された。かくして、閩東語テレビ放送は、当地で着実に増加し、また市民権を得ていったのである。鐘(2011)には、2011年某日の福州電視台生活チャンネルの番組表が掲載されており、これに筆者が各番組の使用言語を付記したものが表3である。

そして、閩東語テレビ番組は、その後も衰えるどころか、むしろ増えていった。2016年10月20日(木)に福州電視台生活チャンネルで放送された番組及びその使用言語を取りまとめたものが表4であるが、今日では、同チャンネルの大半の番組が閩東語によるものとなっており、その増加傾向は顕著なものといえる。

### Ⅲ. 福州電視台の方言放送専門チャンネル開設をめぐる動向

福州市人民政府によるウェブサイト「福州市12345政府公共服務系統」(<http://fz12345.fuzhou.gov.cn/>)では、市民から各種類型(通報、苦情、提案、照会等)の投稿を受け付け、これに対して同市の各部門及び関係機関による回答が行われている(最終閲覧2017年3月3日)。

同サイトを確認すると、閩東語に関する投稿が多数存在しており、さらに放送関連の内容も散見され、なかには福州電視台による方言放送専門チャンネルの開設に関するものも認められる。以下では、全7件の投稿に対する福州広電集團及び福州市広播電影電視局(以下、福州広電局)の回答

を時系列に確認することにより、2009~2011年にかけての福州電視台による方言放送専門チャンネル開設をめぐる動きを追っていくこととした。

表3 2011年某日の福州電視台生活チャンネルの番組表

時間	番組名	言語
7:15	攀講(再放送)	閩東語
8:15	榕城風	閩東語
8:35	閩都大講壇	普通話
9:20	我愛健康(再放送)	普通話
11:10	懷旧劇場	普通話
12:05	城区新聞	普通話
12:15	生活零距離(再放送)	普通話
13:00	玩轉福州(再放送)	普通話
13:40	經典劇場	普通話
14:55	經典劇場	普通話
16:05	玩轉福州(再放送)	普通話
16:45	榕城風(再放送)	閩東語
17:05	閩都大講壇	普通話
17:35	攀講網事(再放送)	閩東語
18:00	攀講電影	閩東語
19:10	攀講	閩東語
20:10	生活零距離	普通話
20:40	法眼	普通話
21:00	攀講網事	閩東語
21:25	玩轉福州	普通話
21:45	我愛健康	普通話
22:00	福州新聞(再放送)	普通話
22:20	都市劇場	普通話
0:20	星光劇場	普通話

(鐘(2011)の表3に筆者が使用言語を付記)

まず、方言放送専門チャンネルに関する初の投稿は、2009年4月4日受付の「福州3チャンネルを一律福州話とするよう提案します」(照会番号<sup>(6)</sup> : FZ09040400103) というタイトルの長文である。この内容は、福州電視台生活チャンネルの全番組を閩東語にするということからはじまり、閩東語の広告や衛星チャンネルの導入、さらには具体的な番組内容・構成等にまで及ぶ壮大な提案

表4 2016年10月20日(木)の福州電視台生活チャンネルの番組表

時間	番組名	言語
7:00	攀講劇場(再放送)	閩東語
8:48	榕城風(再放送)	閩東語
9:50	攀講(再放送)	閩東語
10:34	攀講故事会(再放送)	閩東語
11:29	法眼(再放送)	普通話
12:02	攀講劇場(再放送)	閩東語
13:55	生活零距離(再放送)	普通話
14:26	攀講(再放送)	閩東語
15:12	攀講故事会(再放送)	閩東語
16:04	生活零距離(再放送)	普通話
16:37	法眼(再放送)	普通話
17:00	榕城風	閩東語
18:00	攀講故事会	閩東語
18:53	攀講劇場	閩東語
20:50	攀講	閩東語
21:30	生活零距離	普通話
22:00	法眼	普通話
22:20	攀講故事会(再放送)	閩東語
23:08	攀講(再放送)	閩東語

(福州明珠網 (<http://www.fzntv.cn/>) での視聴結果に基づき筆者作成)

である。

この投稿に対する福州広電集団の回答は、意見の投稿に対する謝意や番組制作の方針等を記した当たり障りのない一般的なものであり、肝心の方言放送専門チャンネルの開設に関する見解はなんら示されていない。

次の投稿は、2009年11月10日受付の「福州電視台は福州話チャンネルを開設すべきです」(照会番号 : FZ09111000349) というタイトルであり、「福州文化を発揚し、福州話を普及させることで、高齢者の生活を豊かなものにしてください」という簡潔な内容である。

この投稿に対する福州広電集団の回答は、次の通りである。

福州話の普及と福州文化の発揚に関連した事業に関しましては、私どもの各チャンネル・番組に既に反映いたしておりますが、福州話チャンネルの開設業務も、もう準備段階にあり、只今当該チャンネルの周波数の利用申請及び番組の構成につきましても準備を始めております。

この回答からは、福州電視台に方言放送専門チャンネルを開設する意向が確かに存在していたことが分かる。

2009年11月22日受付の「福州電視台の福州話チャンネルについて伺います」(照会番号 : FZ09112200129) というタイトルの投稿は、上記の回答等を踏まえた内容と見られ、「福州電視台で福州話チャンネルが準備中のようですが、その進捗状況がどうなっているのか分かりません。具体的な、あるいは大まかな放送開始の時期は決まっていますか?」と記されている。

この投稿に対しては、福州広電集団ではなく、福州広電局が次のように回答している。

チャンネルの開設には広電総局の審査及び許可が必要であり、また同時に国の方言放送専門チャンネル開設に係る条件は大変に厳しいものとなっています。そのため、現段階では、福州電視台が福州話番組「攀講」を放送しているところです。

当局が方言放送専門チャンネルの開設には高いハードルが存在しており、それゆえ特定の方言番組を放送するに留まっているという見解を示したことからすれば、閩東語放送専門チャンネルの実現は困難なものと推察される。

ところが、福州電視台では、方言放送専門チャンネルの開設に向けた検討が依然続けられていた。約1年後となる2010年11月24日受付の「福州電視台による福州話専門チャンネルの開設を提案します」(照会番号:FZ10112400211)というタイトルの投稿は、「福州話専門チャンネルの放送開始を希望します」という一文のみであるが、これに対する福州広電集団の回答は次の通りである。

福州話を伝播し、福州文化を発揚するためには、私どもは福州話専門チャンネルの開設に向けた検討を確かに始めています。しかし、チャンネルの開設申請及び放送開始には広電総局の許可を必要とし、今のところは当該チャンネルの資源を欠いていることから、関係する許可文書を獲得するには至っておりません。

また、翌2011年5月3日受付の「福州電視台はいつ福州話チャンネルを開設するのですか」(照会番号:FZ11050300094)というタイトルの投稿は、「福州電視台が福州話チャンネルの開設を計画に盛り込むことを希望します。方言番組を大いに発展させてください」という内容である。

この投稿に対する福州広電集団の回答は、前年11月24日受付の投稿に対するものと結論部分は基本的に同じであるが、「福州話チャンネルの開設に係る件につきましては、一貫して私どもの重点プロモーション事項としておりまして、現在、福州話専門チャンネルの開設に関連する事項を広電総局に届け出ているところです」という記述が確認でき、その後も福州電視台で方言放送専門チャンネルの開設に向けた準備が継続されてきたことが窺われる。

しかしながら、こうした取組みは、2011年前半までで終了したようである。同年8月8日受付の「福州広電集団がタイミングを見計らって、積極的に福州話のテレビチャンネル開設に向けた申請を行うことを希望します」(照会番号:FZ11080800012)というタイトルの投稿は、直近二者と同様に方言放送専門チャンネルの開設を要望する内容であるが、これに対する福州広電集団の回答には大きな変化が認められる。

広電総局令第37号<sup>(7)</sup>その他関連政策に基づき、テレビチャンネルの位置づけ等に関する開設計画には厳格な審査手続が存在しております、目下全国で方言放送専門チャンネルとして開設が許可された事例は、粵語、閩南語その他の大言語に限られています<sup>(8)</sup>。

福州電視台生活チャンネルでは、現在「攀講」シリーズの番組と「榕城風」という方言を使用したバラエティ番組を放送しておりますが、これらの番組は、福州文化の伝承という領域において、積極的な意義を有しています。特に「攀講」シリーズの方言番組は、大変優れた成果を得ており、福州市民の人気を広く獲得し、当地の視聴者のニーズを満たしています。私どもは、引き続き方言番組を豊かなものとしていくつもりであり、例えば方言劇場の導入を計画するなど、福州電視台の

方言番組をより良く、またより優れたものとして、視聴者の方々のニーズを更に満足させて参ります。

この第1段落は、粵語や閩南語ほど使用人口が多くはない閩東語を用いた方言放送専門チャンネルは、現状では開設が困難だという趣旨に解される。また、第2段落は、方言放送専門チャンネルの開設は厳しいことから、今後は、これに向けた取組みを継続するのではなく、既存のチャンネルでの閩東語番組の充実に注力していく意向が示されているものと捉えられる。

さて、上記回答から数か月後、再び方言放送専門チャンネルの開設に関する投稿が行われている。2011年11月17日受付の「福州電視台は福州話チャンネルを開設できるのでしょうか?」(照会番号:FZ11111700590)がそれであり、内容は次の通りである。

関係部門の方言放送専門チャンネルに係る規定は大言語に限られたものかも知れませんが、福州は地理的に特殊な位置に存在しております、台湾（馬祖）の間近にあるので、福州話のテレビチャンネルを開設して、台湾に対する宣伝を実施するということも可能なのではないでしょうか？左海之声のように。また、申請はされているのでしょうか？

この内容は、直近の回答を受けて、ラジオの先例も引き合いに出しつつ、さらに一歩踏み込んで福州電視台での方言放送専門チャンネル開設の可能性を問い合わせるものである。そして、これに対する福州広電集団の回答は、大部分が前回と同じであるが、次の通り、照会内容に対応した説明が追加されている。

……台湾省の主要な方言は閩南語及び客家

語であり、福州は台湾と隣接しているものの、台湾に対する宣伝という理由は、福州話チャンネルの開設申請の根拠としては、なお十分なものではないとされています。この点に鑑みまして、私どもは一定数の福州話による番組を現在の生活チャンネルに根付かせていくことといたしました。

この回答からは、福州電視台が方言放送専門チャンネルの開設を断念し、生活チャンネルでの閩東語番組の制作・放送に重点を置いた活動を展開する方向に舵を切ったことがより明確に読み取れる。

以上を総じていえば、福州電視台には、2009年以降、方言放送専門チャンネルを開設する計画が存在し、その申請に向けた具体的な準備も行われたものの、最後まで広電総局の許可が下りることなく、2011年後半からは、生活チャンネルの閩東語番組を充実・拡張する路線に方針転換が図られたものと判断される。

#### IV. 考察

本章では、福州電視台の閩東語テレビ放送をめぐる事象を考察する。

##### 1. 方言放送専門チャンネル開設の許可審査——二重の基準

前章で確認した通り、福州電視台は方言放送専門チャンネルの開設許可を得ることができなかつた。しかし他方で、左海之声には、その許可が下っている。

使用言語に関しては、福州電視台が開設を計画した方言放送専門チャンネルも左海之声も、ともに閩東語である。また、左海之声のキャッチフレーズは第2章第1節で既述した通りであるが、福州電視台の方言放送専門チャンネルも基本的には同様の目的をもって申請に臨んだように思われ

る。

しかるに、片やラジオでは方言放送専門チャンネルの開設が認められ、テレビの方ではそれが実現しなかった。福州広電集団の回答からすれば、テレビの方言放送専門チャンネルの開設に当たっては、当該方言の使用人口や対外的な宣伝効果の程度等に關し、ラジオよりも高い水準が要求されるものと判断される。換言すれば、方言放送専門チャンネル開設の基準は、ラジオとテレビとで二重になっており、前者よりも後者の方が厳格なものとなっているのである。

このようにラジオとテレビとで異なる結論が導出された要因としては、やはり2つのメディアの違いが挙げられ、相対的に影響力の大きいテレビの方言放送専門チャンネルには、より厳しい基準が適用されたものと推察されるところである。

なお付言すれば、大陸と台湾のFMラジオ放送の周波数帯は同じである一方、テレビ放送の映像方式等は異なることから、この点が馬祖に対する宣伝効果という観点から減点要素となった可能性もある。ただし、泉州電电视台閩南語チャンネルの事例から類推すれば、映像方式等の相違は、最終的な判断を左右するような事項とまではいえないだろう。

## 2. 生活チャンネルの現状——事実上の方言放送専門チャンネル化

前々章で確認した2011年及び2016年10月の福州電电视台生活チャンネルにおける閩東語番組の本数及び放送時間をまとめると表5のようになる。

現在の同チャンネルの全放送時間に占める閩東語番組の割合は、すでに80%を超えており、もはや方言放送専門チャンネルといつても差支えない状況である。また、2016年10月20日の同チャンネルの閩東語番組の新規放送時間を合計すると270分となるが、これは泉州電电视台閩南語チャンネルの1日の新規放送時間とされる200分<sup>⑨</sup>よりも長い。

表5 福州電电视台生活チャンネルの閩東語番組の放送状況の比較

	2011年某日	2016年10月20日
閩東語番組の放送本数 (再放送分を含む)	7本	13本
全体の番組数に占める 閩東語番組の割合 (%)	30.4%	68.4%
閩東語番組の放送時間	280分	850分
全体の放送時間に占める 閩東語番組の割合 (%)	27.3%	83.3%

(表3及び表4の情報(最初の番組から同日24時まで)に基づき筆者作成)

沈(2015)によれば、泉州電电视台閩南語チャンネルの開設後、漳州電电视台及び龍岩電电视台も方言放送専門チャンネルの開設を申請したとされるが(p.195)、今日まで実現されていない。この要因に関しては、広電総局がテレビの方言放送専門チャンネルの開設に非常に抑制的であり、容易に許可が下りないことがまずもって思い浮かぶ一方で、拙稿(2016a)で既述した通り、福建省南部の閩南語テレビ番組は、市場では必ずしも成功しておらず、テレビ局側が経営判断から開設を見送った可能性も考えられる。

こうした状況に対して、福州電电视台生活チャンネルは、方言放送専門チャンネルとしての開設許可を得てはいないものの、方言主体のテレビ放送を実施している事例として注目に値するものである。すなわち、同チャンネルの現状からは、①福建省では、関係法令等<sup>⑩</sup>の運用上、広電総局の許可がなくとも、方言番組主体のチャンネルを実現することが可能であること、②市級テレビ局の既存のチャンネルであっても、工夫次第では方言番組中心のラインナップで経営していくことが可能であることが指摘できる。

## V. 結論

本稿の結論は、次の通りである。

①福州電电视台には、かつて閩東語チャンネルを

開設する計画が存在し、申請に向けた準備も進められたが、広電総局は方言放送専門チャンネルの開設を許可しなかった。

②当該事例と左海之声の事例を比較すると、方言放送専門チャンネルの開設許可に係る基準は二重であり、テレビの方がラジオよりも審査が厳格であることが指摘される。

③福州電視台は、その後方向転換を図り、徐々に閩東語番組を充実・拡張させる形で、既存の生活チャンネルの実質的な方言放送専門チャンネル化を実現した。

福州電視台の事例は、台湾に対する宣伝という大義名分を一応備えているといった程度では、広電総局は方言放送専門のテレビチャンネルの開設を許可しないということを明らかにし、泉州電視台閩南語チャンネルの特異性を一層際立たせた。他方、福州電視台生活チャンネルは、いわば実力で閩東語番組を増加させることにより、事実上の方言放送専門チャンネル化を果たし、一方の泉州電視台閩南語チャンネルはといえば、市場での苦戦を強いられている。したがって、この2つのチャンネルは、いずれも福建省にて方言番組を主体とした放送を実施している点で共通しているものの、その内実に目を向ければ、相互に対照的な存在というべきであろう。

最後に、次の通り、本稿に関連する今後の課題を提示しておきたい。

第1に、福州電視台生活チャンネルの実質的な方言放送専門チャンネル化は、「攀講」をはじめとする閩東語番組の人気を抜きにしては語ることができないものであり、ゆえに同チャンネルの経営戦略や番組内容等のより詳細な検討が必要である。

第2に、福建省には、莆仙語が主流の方言である莆田市や、客家語が主流の方言である龍岩市など、特徴的な地域がなお存在している。同省における方言番組の実情及び関連政策の実態を更に明

らかにするには、より多くの事例を考察していかなければならない。

第3に、中国共産党福建省委員会の機関誌に掲載された王・陳（2016）によれば、間もなく「福建方言保護条例」の制定に向けた調査・研究が開始されることとされており、こうした政策動向についても注視・検討することが求められよう。

### [注]

(1)同台は、1983年に設置された福州教育電視台を前身とし、1984年10月に開設された市級テレビ局（地級市を放送エリアとするテレビ局）である。主要なチャンネルは、ニュース総合チャンネル（FZTV-1）、映画ドラマ・娯楽チャンネル（FZTV-2）、生活チャンネル（FZTV-3）及び少年児童チャンネル（FZTV-4）の4つであり、さらに通販用のチャンネル及び路線バス用のチャンネルを擁している。

(2)広義の閩東語には、福建省寧德市で使用されている福安話等や、浙江省温州市で使用されている蜜話（蜜講）等も包摂されるが、これらは除外する。他方、福州市内で使用されている福清話や長樂話等は、相互に一定の差異を有しているが、本稿ではいずれも閩東語に含める。

(3)中国新聞網（2010年10月18日）「大陸首家福州方言對馬祖廣播『左海之声』18日落地」<http://www.chinanews.com/tw/2010/1018/2592514.shtml>（最終閲覧2017年3月3日）。

(4)同番組の開始時期に関しては、正確な情報が得られていない。例えば、福州電視台の関係者による論考でも、陳（2007）は2000年とし、吳（2013）は2001年としており、一定の開きがある。

(5)同番組は、訴訟沙汰にまで発展する問題（著作権侵害）を起こして放送中止となり、それ以降は「攀講劇場（おしゃべり劇場）」という後継番組が放送されるようになった。

(6)福州市12345政府公共服務系統「訴求件列表」

(<http://fz12345.fuzhou.gov.cn/callcenter/callSearchDo.do>) の「訴求流水編号」欄に当該番号を入力することにより、各投稿・回答及び関連情報を閲覧することができる（最終閲覧 2017年3月3日）。

(7)筆者注：ラジオ局及びテレビ局の審査及び許可に係る管理弁法（広電総局令第37号）と見られる。同弁法は、ラジオ局及びテレビ局がチャンネルを開設する際の事項等を規定している。

(8)筆者注：管見の限り、中国に現存するテレビの方言放送専門チャンネルは、次の4つである。すなわち、広東電視台珠江チャンネル（広東省／粵語）、南方電視台衛星チャンネル（広東省／粵語）、泉州電視台閩南語チャンネル（福建省／閩南語）及び梅州電視台客家公共チャンネル（広東省／客家語）である。他方、拙稿（2016a；2017）で確認した通り、浙江省及び江蘇省では、関係通知で方言放送主体のチャンネルの開設は禁止されている。したがって、福州広電集団の回答は、事実に合致した内容といえる。

(9)黄（2013）に示された数値である。

(10)この詳細は、拙稿（2016a）を参照のこと。

## [参考文献]

### (邦文)

- 井上史雄（2017）「福建語境界意識の連続体——方言区画と方言イメージ」日本言語政策学会『言語政策』13号。
- 小田格（2016a）「中華人民共和国福建省南部における閩南語テレビ放送について——対台湾政策下における特例措置」日本言語政策学会『言語政策』12号。
- （2016b）「中華人民共和国浙江省における方言番組と政策変容——新旧の関係通知をめぐって」一般社団法人中国研究所『中国研究月報』70卷8号。
- （2017）「中華人民共和国江蘇省における

方言番組とその規制——関係通知の策定背景及び運用実態を中心に」一般社団法人中国研究所『中国研究月報』71卷2号。

### (中文)

- CSM媒介研究（2005－2013）『中国電視收視年鑑』2005～2013年版、中国伝媒大学出版社。
- 陳素華（2007）「電視欄目選題策画浅析」『東南伝播』2007年11期。
- 『福建經濟年鑑』編輯委員会（1985）『福建經濟年鑑』福建人民出版社。
- 福建省地方志編纂委員会（2002）『福建省志・广播電視志』方志出版社。
- 『福州年鑑』編纂委員会（2008－2011）『福州年鑑』2008～2011年版、方志出版社。
- 郭穎（2007）「明確定位打造差異——地市台編排差異化之我見」『東南伝播』2007年10期。
- 黃明波（2013）「方言電視對文化生態影響探析——基於泉州南安市振光村和蓉中村的田野調查」『攀枝花学院学報』2013年8期。
- 沈文鋒（2015）『城市文化与城市電視台：以泉州為例』廈門大学出版社。
- 宋晶（2010）「福州話電視節目『攀講』的發展瓶頸與策略分析」『東南伝播』2010年3期。
- 王雲生・陳斌（2016）「加強福建方言文化的保護和伝承」『海峽通訊』2016年7期。
- 吳乃心（2013）「從方言節目中挖掘收視潛能和傳播力」『中国广播電視学刊』2013年5期。
- 吳乙平（2003）「“更活潑”与“更規範”——福州電視台節目創新的啓示」『中国广播電視学刊』2003年11期。
- 中国广播電視年鑑編輯委員会（1988－2016）『中国广播電視年鑑』1988～2015年版、北京广播電視出版社。
- 鐘連珍（2011）「新形勢下電視節目編排創新思考」『影視制作』2011年7期。